02 シラバスの整備

1.シラバスとは

・シラバスは学生と教員の契約書
・カリキュラムの中のシラバス
・Plan-Do-Check-Action（PDCA）とシラバス
・より良いシラバスを目指して

2.シラバス記載上の注意

・開講後のシラバスの変更

3.シラバスの執筆と点検

・シラバス記載上の留意事項

4.シラバス記載例

・神学部（講義形式）
・政策学部（演習形式）
・理工学部情報システムデザイン学科（講義形式）
・スポーツ健康科学部（講義形式）
・グローバル・コミュニケーション学部（外国語）
TOPIC／シラバス整備について

1. シラバスとは

シラバスは学生と教員の契約書

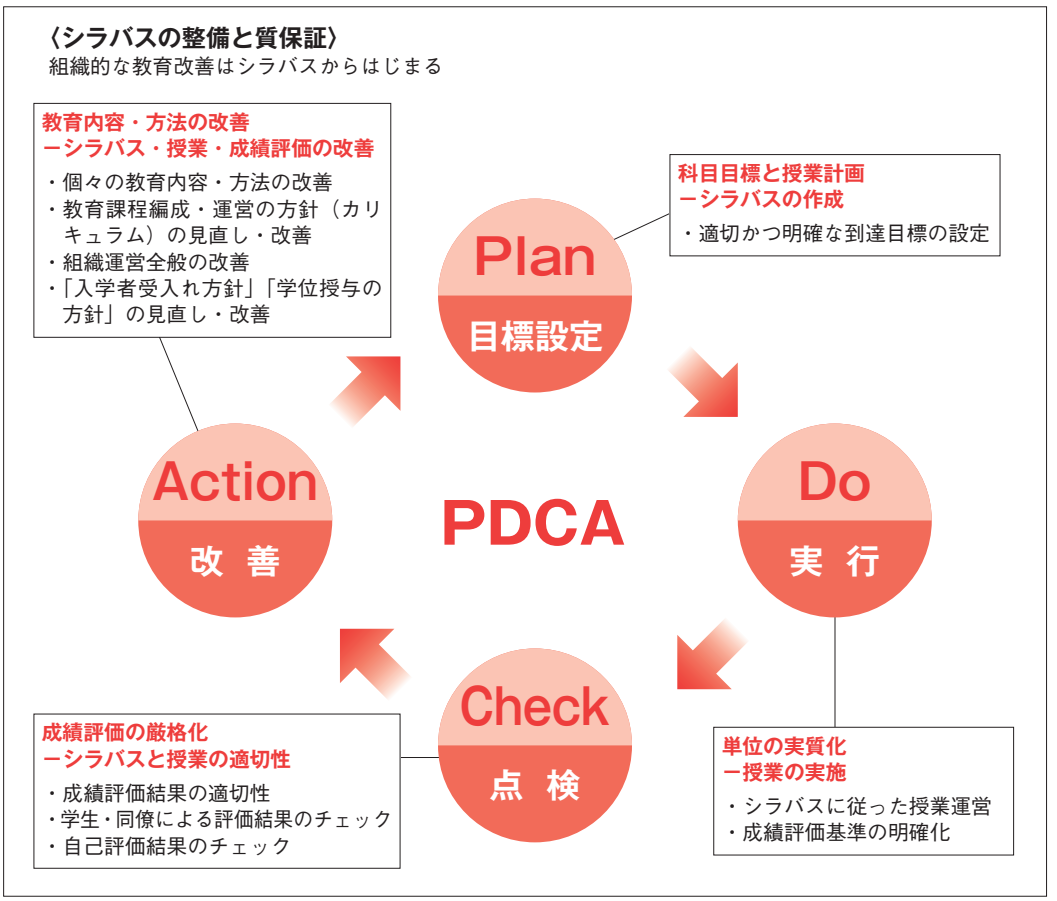
シラバスは講義の方針や学習計画を学生に周知させる目的で作成されるものです。我が国の大学で用いられるシラバスは米国で慣用される形式が一般的で、講義の目的、講義の対象者、開講学期・期間、使用教材、到達目標、予習と復習をすべき事柄、成績評価方法とその基準、教員との連絡方法、そして毎回の授業計画など、学生が講義を受けて単位を取得するために必要な情報がほぼ含まれています。学生はこのようなシラバスを参考にして、履修科目登録時に科目選択を行ない、受講することになります。つまり、シラバスは受講する側の学生にとって不可欠なものであり、講義する側の教員との契約書とも言えるでしょう。契約書である以上、学生と教員の双方が「契約」に従う義務も生じます。お互いがこの義務を果たすことによって、学生は受講に際して準備すべき事柄や評価の基準をあらかじめ理解することができ、教員にとっては、綿密に作成されたシラバスは授業計画に狂いが生じることなく、到達基準や成績評価の明確化は履修判定を容易にしてくれるというメリットも生まれてきます。

カリキュラムの中のシラバス

大学で行なわれる個々の講義は大きな学問体系の枠組みとしてのカリキュラムの中に位置づけられています。そのため、自分の担当する科目と他の科目との関係に配慮し、科目間の縦糸と横糸を紡ぐこと（科目ヒエラルキー）をも意識して作成するべきでしょう。自己完結型シラバスは学問体系から逸脱することになりかねません。

Plan ・ Do ・ Check ・ Action（PDCA）とシラバス

シラバスは説明責任を果たす公文書の一つとして捉えられますが、そこにはPDCAサイクルが盛り込まれています。すなわち、科目目標と適切な授業計画などは①Plan（目標設定）であり、②Do（実行）は単位の実質化（シラバスに従った授業運営、成績評価基準の明確化）、③Check（点検）は成績評価の厳格化（学生や担当者自身、同僚による評価結果のチェック）、そして④Action（改善）では、個々の教育内容・方法の改善と教育課程編成（カリキュラムの中のシラバス）や組織運営全般の改善などを行ないます。PDCAサイクルを継続的に行なうことで、入口（入学者受入れ方針）と出口（学位授与）の改善も視野に入ってきます。



より良いシラバスを目指して

かつて大学の講義は、教授する側の一方通行で終わる形式が少なからずみられました。しかし、大学設置基準の大綱化以降、シラバスの整備をはじめとする学生と教員の双方向授業が重視され、現代のシラバスは、学生サービスのための便宜ではなく、学生と教員の双方が講義に責任をもつことを促しています。このことは、「学生の思い込み」や「教員の独善」を修正してくれることにも繋がっていきます。授業の過程でこのような事態が起これば、それを改めていくことも必要で、場合によっては、学生の了解を得て授業計画も思い切って変更せざるを得ないこともあるでしょう。また、問題点が明らかになれば次年度のシラバスを改訂しなくてはなりません（PDCA サイクル）。学生と教員が共により良いシラバスを作り出していくと言えるでしょう。

2. シラバス記載上の注意

シラバスの記載にあたっては、学生がその講義の全体像を把握できると共に、毎回の授業の内容、成績評価の基準などをなるべく具体的に理解できるようにすることをねらいとして作成することが求められます。本学では、全学的なシラバスの整備を目的として、シラバスに関するガイドラインを定めています。以下においては、ガイドライン（P.28参照）に基づき、シラバスにおける必須記載事項である、その講義の「概要」、「到達目標」、「授業計画」、「授業時間外の学習」、「成績評価基準」、「評価のポイント」を中心にシラバス作成の際に留意すべき主な点をみていきましょう。

開講後のシラバスの変更

シラバスの記載事項は、原則として開講後に変更することはできません。

・概要　・到達目標　・成績評価	・授業計画　・参考文献 ・テキスト　・参照URL
↓	↓
変更は認められません	授業を進めていく中で、どうしても変更しなければならない場合、受講生と相談の上、若干の変更をすることは可能です

変更した場合、ホームページ上のシラバスの変更及び教室で紙媒体によるシラバス変更を配付することによって、必ず学生に周知してください。科目によって授業計画の変更が予測されるようなときには、あらかじめ最初のシラバス作成の際にその旨をコメント欄に記載しておくとよいでしょう。

3. シラバスの執筆と点検

各教員より提出されたシラバス原稿は、シラバス整備のガイドラインに基づき、各学部・研究科・センターのFD委員会において点検します。右記「シラバス記載上の留意事項」に照らして不備や欠落が認められる場合は、修正を依頼する場合がありますのでご留意ください。

シラバスの具体的な書き方は、授業形態（講義／演習／外国語／その他）や学問分野などによって一定の相違があるべきものと思います。P.18からは、シラバス記載例を提示していますが、あくまでもひとつの参考としてご参照ください。

参考URL

●シラバスWEB検索
https://syllabus.doshisha.ac.jp/

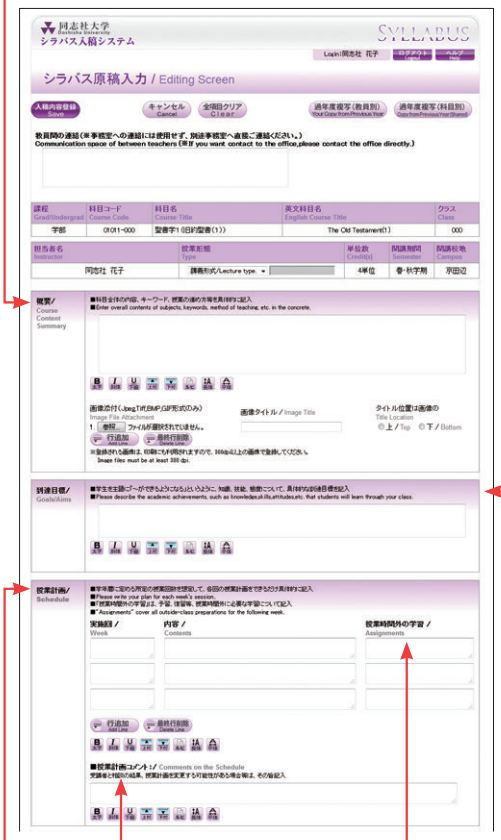
シラバス記載上の留意事項

概要
講義全体の内容、ねらい、キーワード、授業の進め方などを示すものです。できるかぎり簡潔に分かりやすく記載することが求められます。

到達目標
その講義を通して学生が習得することを期待される知識、技能、態度などを具体的に示すものです。「～ができるようになる」、「～を理解する」、「～を習得する」などの表現を用いて、目標を個別に列挙するといいでしょう。

成績評価基準
成績の評価項目（試験、レポート、出席点など）を明示します。複数の評価項目を用いることを前提として、それぞれの項目が最終的な成績に対して占める割合（点数配分）を「%」で表記してください。

評価のポイント
各評価項目において、具体的にどういうことが評価のポイントとなるかを、分かりやすく具体的に記載することが求められます。



授業計画コメント
授業計画を変更する可能性がある場合は、必ず記載してください。

授業計画
学年暦に定められた授業回数を想定し、毎回の授業内容のテーマや内容など、授業の予定を記載します。できるかぎり具体的に記載することが求められます。

授業時間外の学習
毎回の授業に対応するかたちで学生に求められる予習・復習など、授業時間外に必要な学習について、できるかぎり具体的に15回分記載することが求められます。

テキスト・参考文献
著作者、タイトル、出版元、出版年を必ず記載してください。「コメント」欄には、該当テキスト・参考文献に関するコメントを、「テキストコメント」、「参考文献コメント」欄には、複数のテキスト・参考文献全般に関するコメントを記載してください。

参照URL
授業の中でホームページを参照する場合は、アドレスを明示してください。

備考
補足説明のある場合は記載してください。

4. シラバス記載例

神学部（講義形式）

科目名：近世キリスト教史1（ドイツの宗教改革）
担当者：村上みか

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
03141	○近世キリスト教史1 （ドイツの宗教改革）	2単位	春学期	今出川	講義形式

概要

宗教改革はキリスト教史においてとりわけ大きな意味をもつ。しかし，その理解については，これまで必ずしも明確で一致したものが提出されてきた訳ではない。プロテスタント教会にとって宗教改革は「福音の再発見」という神学史上，極めて意義のある出来事であったし，他方，カトリック教会は，「教会分裂」の原因としての否定的な宗教改革理解を長らく示してきた。このような独自の教会理解に規定された解釈を克服し，より本質的な理解に近付くために，本講では宗教改革を歴史的文脈の中に位置付け，相対的に把える視点を提示する。具体的には，ルターの「95ヶ条の提題」に端を発する宗教改革が，当時の教会内外の様々な要因に支えられて大きな教会改革運動へと展開する様子を明らかにする。すなわち，当時の教会状況，政治，経済，社会状況，また思想状況との関連で，宗教改革が成立し，展開してゆく過程を追い，同時にルターの神学が周囲との様々な議論を通じて展開していく様子を把える。このような考察を通じてプロテスタント教会の神学と教会形成の基礎を理解し，同時にそれが歴史的に規定されたものであったことを学ぶ。

到達目標

①中世末期から宗教改革期に至る中央ヨーロッパの歴史を，政治，経済，社会，教会という多様な側面から理解することができるようになる。
②宗教改革の成立と展開について，歴史的に考察する力を身につける。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	授業概要の説明	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
2	＜宗教改革前史＞ 中世末期のヨーロッパ（1）政治，経済	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
3	中世末期のヨーロッパ（2）社会	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
4	中世末期のヨーロッパ（3）人文主義	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
5	中世末期のヨーロッパ（4）ローマ教会，教会内外の敬虔運動	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
6	中世末期のヨーロッパ（5）神学	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
7	＜宗教改革の成立と展開＞ ルター：信仰の歩み	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
8	ルター：神学の形成	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。

9	「95ヶ条の提題」と贖宥論争	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
10	ローマ教会の対応と神学論争の発展	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
11	社会の反響と改革運動の拡大（1）ルターの支持者たち	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
12	社会の反響と改革運動の拡大（2）運動拡大のプロセス	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。
13	改革運動内部の神学論争（1）律法と福音，聖餐論	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。またレポート作成の準備をする。
14	改革運動内部の神学論争（2）自由意志論と奴隷意志論	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。またレポート作成の準備をする。
15	まとめ	ノートと配布資料をもとに授業内容を復習する。またレポート作成の準備をする。

授業計画コメント

成績評価

平常点（出席，議論への参加）	30%	出席率と授業時の議論への参加について評価を行う。
期末レポート試験	70%	問題を歴史的文脈の中で考察し，それを独自の言葉で表現できているかを評価のポイントとする。

テキスト

授業時に適宜，配布する。

参考文献

A. E. マクグラス（高柳俊一訳）『宗教改革の思想』初版（教文館，2000年）
金子晴勇，江口再起　共編『ルターを学ぶ人のために』初版（世界思想社，2008年）

参照URL

備考

政策学部（演習形式）

科目名：演習I-14（世界経済・金融の身近な問題を考える）
担当者：根岸祥子

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
70101-014	△演習I-14 （世界経済・金融の身近な問題を考える）	2単位	秋学期	今出川	ゼミ形式

概要

世界で起きている経済・金融や開発援助に関する諸問題をさまざまな角度から検討する。文献の輪読を通じて国際金融の基礎知識を身に付けながら，エクセル等を使った情報処理の基礎演習を行う。その後，身に付けた知識を実際の問題に結び付けられるよう，身近な経済・金融のテーマについてディベートを行う。その他，学外活動等も通じて，国際金融という分野を学ぶスタート地点としてもらいたい。

到達目標

演習Ⅱ－14においては，世界経済・金融に関する映像を見てディスカッションし，英語文献を読んで発表を行なうので，そのための基礎知識をしっかりと身に付けることを目標としている。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	イントロダクション	各自発表準備
2	情報処理演習	グループ発表準備と各自予習
3	テキストまとめとディスカッション（1）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
4	テキストまとめとディスカッション（2）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
5	テキストまとめとディスカッション（3）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
6	テキストまとめとディスカッション（4）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
7	テキストまとめとディスカッション（5）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
8	テキストまとめとディスカッション（6）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
9	テキストまとめとディスカッション（7）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
10	テキストまとめとディスカッション（8）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
11	テキストまとめとディスカッション（9）	グループ発表準備と各自予習、事後レポート作成
12	テキストまとめとディスカッション（10）	事後レポート作成
13	情報処理演習	情報処理課題レポート作成、ディベート準備
14	ディベート（1）	ディベート準備、レポート作成
15	ディベート（2）	レポート作成

授業計画コメント		
グループ単位のテキスト輪読や研究発表に向けて、各自が担当分野について複数の文献を読んで理解を深めておくことが望ましい。また、履修者の希望や進行状況に応じて変更・入替あり。		
成績評価		
平常点（出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果等）	40%	出席、質疑応答、議論への参加
クラスでの発表など	40%	担当箇所発表およびディベートなど
提出物	20%	レポートなど
テキスト		
秦 忠夫 他『国際金融のしくみ』第4版（有斐閣アルマ，2012）		
参考文献		
参照URL		
備考		
この演習を履修する以前に身につけておくことが望ましいスキル： 読解能力（日本語）、作文能力（日本語）、プレゼンテーション能力（日本語）、調査能力 基本的な読解力、作文力とともに、新聞・ニュース等から自分自身の問題意識を持つ力が望ましい。		

理工学部情報システムデザイン学科（講義形式）

科目名：論理回路
担当者：土屋隆生

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
G1002	△論理回路	2単位	秋学期	京田辺	講義形式

概要

IT技術は言うまでもなく，コンピュータなどのハードウェア無しでは成り立たない。また，高度なソフトウェア開発にはハードウェアの知識も重要である。本講義では，ハードウェアを理解する上で必須となる論理回路について学習する。さらに，ハードウェアをソフトウェア的に設計するためのハードウェア記述言語の基礎についても講述する。

到達目標

（1）論理回路の基礎を理解できるようになる。
（2）組み合わせ回路や順序回路の基礎を理解できるようになる。
（3）簡単な論理回路が設計できるようになる。
（4）ハードウェア記述言語を用いた論理回路の設計法を習得できるようになる。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	ガイダンス，ディジタルとアナログ，2進数	予習・復習
2	基本論理回路	予習・復習
3	ベン図，ブール代数	予習・復習
4	組合せ回路，カルノー図	予習・復習
5	代表的な組合せ回路	予習・復習
6	算術演算回路	予習・復習
7	ディジタルIC	予習・復習
8	中間評価	予習・復習
9	パルス回路，フリップフロップ1	予習・復習
10	フリップフロップ2	予習・復習
11	カウンタ	予習・復習
12	カウンタの設計	予習・復習
13	メモリ，A/D・D/A，FPGA，HDL	予習・復習
14	VHDL	予習・復習
15	まとめ	予習・復習

授業計画コメント		
受講者の理解度に応じて，授業計画を変更することがある。		
成績評価		
平常点（クラス参加，発表，グループ作業の成果等）	10%	講義の理解度を高めるために演習の実施とレポートの提出を行うことがある（複数回）。
中間評価	45%	論理回路の基礎が理解できているか評価する。
期末筆記試験	45%	論理回路設計について総合的に評価する。
テキスト		
春日　健『よくわかるディジタル回路』（電気書院、2012）		
参考文献		
参照URL		
備考		

スポーツ健康科学部（講義形式）

科目名：コーチング論
担当者：松倉啓太

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
F2035	○コーチング論	2単位	春学期	京田辺	講義形式

概要

本講義では，スポーツの指導，コーチングの場面において，「選手を目標とする姿へと導いていく」というコーチングの目的を遂行するために，必要な考え方や指導法を学んでいく。
そのために，ケーススタディやグループでのディスカッションを通して，多岐にわたる競技特性，指導対象やマネジメント活動に対しての自らの考えや意見をまとめていく。

到達目標

1. 積極的な授業への参加を通してコーチに必要な哲学，ならびにコーチングにおける分析，計画，実行のそれぞれ局面において必要な要素を理解すること。
2. 自らの競技活動において，セルフコーチングをできるようになり，自身のパフォーマンスの向上に役立てることができるようになること。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	ガイダンス: コーチングの概念について	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
2	指導者としてのあり方： コーチ指導者に求められる資質とは，コーチングにおける哲学について	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
3	競技者育成のために必要な要素： システム，環境，長期的視野に立った展望について	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
4	コーチングのスタイル： どういうようなコーチになるのか，指導対象に合わせたコーチング	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
5	コーチングの心理： 選手への動機づけ，心理的サポート	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
6	コミュニケーションスキル： どのように伝えるか，聞くか	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
7	トレーニングとは①： トレーニングの概念，どのように現状のパフォーマンスを評価するか	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
8	トレーニングとは②： トレーニング計画の立て方，いつどのようなトレーニングを行うか	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習

9	トレーニングにおけるコーチング法①： 技術的要素の習得（どのように技術を身につけるか，体力・戦術的要素とのかかわり）	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
10	トレーニングにおけるコーチング法②： 戦術的要素の習得（戦術とは，どのように理解させるか）	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
11	トレーニングにおけるコーチング法③： 体力的要素の習得（種目特性に応じて必要とされる体力的要素は何なのか，どのように動機づけさせていくか）	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
12	コーチングにおけるリスクマネジメント： コーチング現場におけるリスクとは，知っておく必要のある医学的知識	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
13	チームマネジメント： チームにおける哲学，組織作り（どういう役割が必要で，何が求められるのか）	予習（授業テーマに関して自らのスポーツの経験を振り返る），復習
14	まとめ	復習
15	授業内評価	

授業計画コメント

受講者数などに応じて，授業計画を変更する可能性がある。

成績評価

平常点（出席，クラス参加，グループ作業の成果等）	30%	出席状況やグループでの活動内容により評価する。
小レポート	40%	内容の妥当性だけではなく，独自性も評価対象する。
授業内評価	30%	内容の妥当性だけではなく，独自性も評価対象する。

テキスト

テキストは特に定めない。

参考文献

レイナー・マートン，大森俊夫・山田茂（監訳）『スポーツ・コーチング学―指導理念からフィジカルトレーニングまで―』（西村書店、2013）
日本体育協会　『公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』

参照URL

備考

グローバル・コミュニケーション学部（外国語）

科目名：コミュニカティブ・イングリッシュ２（Intermediate）
担当者：中田賀之

科目コード	科目名	単位数	開講期間	開講校地	授業形態
95014-532	コミュニカティブ・イングリッシュ２（Intermediate）	1単位	秋学期	今出川	講義形式

概要

予備知識のあるトピックを聞いて，おおよその内容を理解できるようになること，授業で学習した語彙や表現を用いて，自分の感想や意見を述べることができることを，このクラスでの指導目標とする。BBCニュースを聞きながら，リスニング・ストラテジーを学び，学習した語彙や表現を用いて自分の意見を述べられる英語表現力の養成を目指す。BBCニュースで扱われた題材を使用し，１）テキストの内容を理解，２）聞き手を意識した発話になるような音読および発音練習，３）聞き手を意識した自己表現の練習（シャドーイング等による），４）語彙や表現のネットワークの構築化を図る。具体的には，１）リスニング課題の予習，２）語彙や表現をノートに整理，３）エッセイの事前作成（電子掲示板に入力）とその口頭発表をしてもらう。このような活動を通して，コミュニケーションにおける聞き手の理解および自身の英語への気づきと分析力をつける。

到達目標

ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）のB1（「聴解力」，「表現力」）レベルを到達目標とする。具体的には，次の通りである。
・身近な話題について，明瞭かつ標準的な話し方で話された場合には，要点を理解することができる。
・簡単な方法で語句をつないで，自分の経験や出来事，夢や希望，目標等を語ることができる。

授業計画

実施回	内容	授業時間外の学習
1	イントロダクション Unit 1 Puppies at the Tower of London	Unit 1の予習
2	Unit 1 Puppies at the Tower of London 発表	Unit 2の予習
3	Unit 2 Cosplay in London 発表	Unit 3の予習
4	Unit 3 Shakespeare in London's East End 発表	Unit 4の予習
5	Unit 4 Who Owns Banksy's Street Art 発表	小テスト・音読課題の準備
6	小テスト１・音読リフレクション	Unit 5の予習
7	Unit 5 A Crip under the Skin 発表	Unit 6の予習
8	Unit 6 Houses Built from Straw 発表	Unit 7の予習
9	Unit 7 Paternity Leave 発表	Unit 8の予習
10	Unit 8 Young Voters 発表	Unit 9の予習

11	Unit 9 Teaching Digital skills 発表	Unit 11の予習
12	Unit 11 Scotland's Future　発表	小テストの準備
13	小テスト２	グループ発表
14	小テスト３（口頭発表）	発表リフレクション，小テスト準備
15	小テスト３（口頭発表）・まとめと復習	まとめ

授業計画コメント

上の計画に沿った円滑な進行を実現するため，必ず指定箇所を予習した上で授業に臨むこと。リスニングの課題の予習にあたっては，何回視聴し答えに至ったか，この答えに至った理由やキーワードなどを書いておくこと。また，エッセイについては，いずれの立場をとってもいいが，必ず多面的な視点で論じること。語彙，表現・構文，エッセイをノートに整理しておくこと。遅刻・欠席および私語厳禁

成績評価

平常点（出席，クラス参加，グループ作業の成果等）	15%	積極的な学習態度を評価する。
小テスト	45%	学期内で３回小テストを行う（15＋15＋15）
提出物	10%	エッセイ，音読分析
CASEC	30%	試験期間中に行う。

成績評価コメント

上記の評価項目を総合して最終的な成績を算出する。なお，全授業回数の3分の2以上の出席がない場合，期末試験を受験する資格を失う。中間・期末試験の受験は必須である。その他の詳細については第1回の授業で解説する。

テキスト

Timothy Knowles，Daniel Brooks，Yukiko Takeoka，Mayumi Tamura，Rima Uraguchi
『Seeing the World through the News』（金星堂、2016）
92頁　ISBN: 978-4-7647-4015-0

参考文献

参照URL

英辞郎（語学学習用ウェブサイト）
http://www.alc.co.jp

備考

TOPIC

シラバス整備について

シラバス記載上の留意事項について

シラバスの記載にあたっては、学生の主体的な科目選択と学習を促進するよう、以下の留意事項を定める。

①「概要」、「到達目標」、「授業計画」、「授業時間外の学習」、「成績評価基準」、「評価のポイント」の6項目を必須記載項目とする。予めシラバス書式に記載する「成績評価基準」の評価項目は、学部・研究科・センターFD委員会において決定する。

・「概要」は、科目全体の内容、狙い、キーワード、授業の進め方を分かり易く記載する。

・「到達目標」は、学生を主語に「～ができるようになる」というように、知識、技能、態度について、具体的な到達目標を記載する。

・「授業計画」は、学年暦に定める所定の授業回数を想定したものとし、各回の授業計画を可能な限り具体的に記載する。授業中に評価を実施する場合は、定期試験と区別するために「中間評価」「授業内評価」と記載する。

・「授業時間外の学習」は、予習、復習等、授業時間外に必要な学習について可能な限り具体的に記載する。

・「成績評価基準」は、複数の評価項目を使用することを前提とし、各評価項目の最終成績に占める割合を「%」で明記する。

・「評価のポイント」は、評価毎にどのような点が評価のポイントになるか、可能な限り具体的に記載する。

②「テキスト」、「参考文献」を使用する場合は、必ず記載する。その際、出版元、出版年は必ず明記する。

③授業の中でホームページ等を参照する場合は、「参照URL」にアドレスを必ず明記する。

④科目の性格上、上記留意事項による記載が困難なものは、学部・研究科・センターFD委員会において適切な記載方法を定める。

記載内容の点検について

シラバス原稿を各学部・研究科・センターにおいて点検し、留意事項に照らして記載に明らかな不備が認められる場合は、学部・研究科・センターFD委員会より文書等で担当者に改善の要望を行う。なお、平成25年度より実施されている「私立大学等改革総合支援事業」と関連して、「平成27年度私立大学等改革総合支援事業調査票」の中でも、シラバスの記載内容の第三者チェックに関する項目が挙げられている。

【ご参考】平成27年度私立大学等改革総合支援事業調査票（一部抜粋）

タイプ1「建学の精神を生かした大学教育の質向上」

（2）教育の質向上に関するPDCAサイクルの確立

⑥シラバスの作成要領等により、準備学習（予習・復習等）に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容をシラバスに明記することを全教員に求めていますか。【重点項目】

1	全学部等・研究科かつ全学年で実施している。	10点
2	一部の学部等・研究科又は一部の学年のみで実施している。	5点
3	実施していない。	0点

⑦シラバスの作成要領等により、シラバスに到達目標を明記することを全教員に求めていますか。

1	全学部等・研究科かつ全学年で実施している。	4点
2	一部の学部等・研究科又は一部の学年のみで実施している。	2点
3	実施していない。	0点

⑧シラバスの記載内容が適正か否かについて、担当教員以外の第三者がチェックしていますか。

1	全学部等・研究科かつ全学年で実施している。	5点
2	一部の学部等・研究科又は一部の学年のみで実施している。	3点
3	実施していない。	0点

開講後のシラバス記載内容の変更について

シラバス記載内容に関しては、開講後に変更しないことを原則とする。やむを得ず変更する場合は、以下の点に留意し、適切な対応をとることとする。

①「概要」「到達目標」「成績評価」の3項目については、変更不可とする。

②「授業計画」「テキスト」「参考文献」「参照URL」の項目については、変更することが教育的に望ましいと担当者が判断した場合には、受講生と相談の上、開講後も若干の変更を可とする。

・授業計画を変更した場合は、教室で配布する紙媒体のシラバスあるいはWEBシラバス入稿システム上での修正によって、受講生に周知する。

・科目の性質上、シラバス入稿時に授業計画等の変更が予測される場合は、予めその旨を授業計画コメント欄に記載しておく。